

生きる力の培養期

川崎 千束

幼児期は、生きる力の培養期であると思います。倉橋先生の保育理念も、これを原点として、理論を展開されています。

精神病理学の権威故島崎敏樹先生は「誕生から数時間以内に、母の乳房を吸う目的行動に移る。人間は生きる為に、新生児の時点で本能運動が見事にでき上っている」と。この、あの子もこの子も、生まれながらに持っている強い欲求を、育てるか、稀薄にしてしまうかは、幼児期における大人たちのかかわり方に左右されるでしょう。

六月号に黒田成子先生が、改訂される幼稚園教育要

領は、倉橋先生の幼稚園真諦の意義に近いと。私も今さらであっても、現今のあまりに幼稚園的な保育から脱却するなら、子どもたちの幸せのためによるこばしく思います。

二十数年間、入園考査の面接で「どんな子に育てたいか」という私の問いに、母親の殆どが、「健康で素直な子」と答えています。素直さを、子ども自身の徳性として望んでいるのか、それとも大人の物指しが先に在って、それに従うのを、素直とするのか。私は素直より先に、大切な自我の確立を望みます。一応身体的にも自立が叶い、自分というものを

試してみたい三歳頃の変革期に、自我・反抗・我が儘・いたずら等、この期の特権を十分に体得させて

こそ、生命のよろこびを感じ、やがて必然的に、自己抑制・思いやり・正義感などの心情が芽生え、更に判断力・知的好奇心などの知覚が鋭敏になっていくのが、正常な発達の過程でしょう。大人が座禅をくんでいる時は、精神が集中するので、その脳波の図式は穏やかであると。なら、子どもたちが、遊びに没頭している時の脳波の図式も、穏やかではないでしょうか。現代社会情勢の中で、この穏やかさは、子どもたちには欣求の世界で、是非、この境地に浸らせたものです。

私は昭和の初期に、倉橋先生方の教えを受けたことを、有難く且つ誇りとしています。

正規の授業以外に、子どももの若く、しかし未熟な感性を、陶冶してくださったことが、大きく関わっています。狩野芳崖の悲母観音、菱田春草の落葉の

絵の前に立ちつくした感動は、永く私の心に生き続けています。

現在、保育に関する大学教育で、若い心の内面のうずきを理解し、無限の成長へと誘う授業が、どれほどなされているでしょうか。

教育要領改訂と共に、大学教育の検討も必要なのは。例を音楽にとって、子ども世代でも、音楽はピアノ一辺倒でした。家庭に入って、義兄がハーバード在学中に集めたレコードを聴いた恍惚境。何故在学中に名曲の鑑賞がなかったのかと残念に思うと同時に、誰しも、美や音楽に対して潜在能力を持っていることに気がきました。ピアノが堪能でなくても、歌うこと、リズム感、作詩作曲の能力があるかも。ピアノが弾けなくては駄目とする偏向では、ヴィヴィッドな保育者は育ち難いでしょう。

(元東京家政大学附属幼稚園)